



国史跡妻木晩田遺跡

第 33 次発掘調査現地説明会資料

まつおがしら
 ～松尾頭 10 区の調査成果～

【松尾頭 1 号墓・2 号墓とは】

松尾頭 1 号墓・2 号墓 (図 4) は、1996 年に行われた第 1 次調査で発見されました。東に傾斜する緩斜面上に、東西に並んで立地しています (図 5)。いずれも流出した東側を除く 3 辺が溝で区画されていました。

1 号墓の大きさは 10.3 m × 6.4 m で、墳丘上と溝内に計 2 基の埋葬施設がありました。墳丘上の第 1 埋葬施設には柄を巻いたヤリガンナが副葬されていました。2 号墓の大きさは 10.7 m × 8.4 m で、墳丘上に 3 基の埋葬施設がありました。出土遺物から、どちらも弥生時代終末期後半の時期で、2 号墓は 1 号墓の後に築かれたと考えられます。

今回調査した墳丘墓が立地する丘陵と、道路を挟んで北東側に位置する 1 号墓・2 号墓のある丘陵とは、もとはつながっていました。この 3 基のほかにも、墳丘墓の可能性のあるものが尾根上に 4 基確認されており、今後の調査によって形態と築造時期を明らかにしていきたいと考えています。

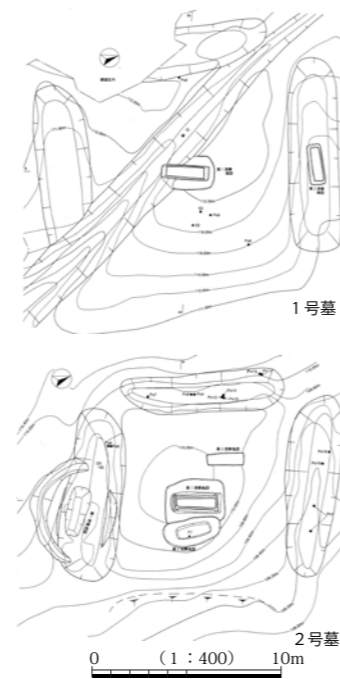


図 4 松尾頭 1 号墓・
2 号墓平面図 (1/400)

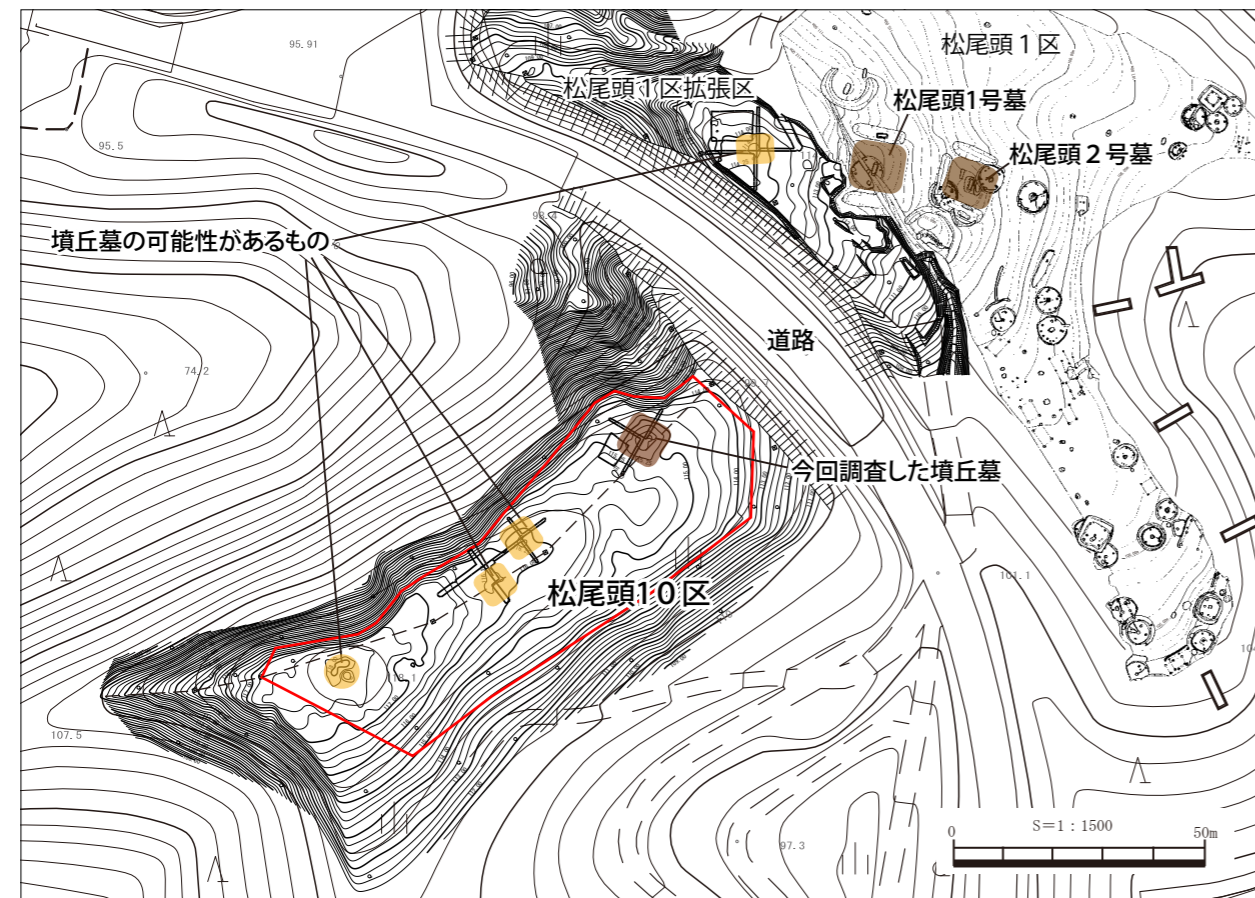


図 5 松尾頭地区の墳丘墓の配置図

鳥取県立むきばんだ史跡公園では、平成 29 年 8 月 23 日 (水) から松尾頭地区で第 33 次発掘調査を行っています。松尾頭地区は妻木晩田遺跡に人々が最初に住み始めた場所です。集落の最盛期 (弥生時代後期後葉：2 世紀後半) には首長層の居住域になりますが、その後集落規模が縮小し、再び規模が拡大する時期 (弥生時代終末期：3 世紀前半ごろ) に、松尾頭地区内で人が住まなくなっていた場所に墓域が形成されます。

今年度の発掘調査は、平成 25 年度の調査で新たに確認された墳丘墓の形態と築造時期を明らかにすることと、居住域に墳丘墓が築造されて墓域に変わる過程を明らかにすることを目的としています。

妻木晩田遺跡ではこれまでに 36 基の墳丘墓が見つっていますが、このうち松尾頭地区には 2 基の墳丘墓 (松尾頭 1 号墓・2 号墓) があります。今回調査を行った墳丘墓は、四角い墳丘の外周に沿って溝が掘られ、その四隅が途切れて土橋のように溝の外側とつながる、「方形区画墓」であることがわかりました。これは松尾頭地区でこれまでに見つかった 2 基の墳丘墓と同じ形態です。また出土した土器から、弥生時代終末期の墳丘墓であることがわかり、1 号墓・2 号墓よりも前に造られた可能性があります。

妻木晩田遺跡の集落が、最盛期から一度規模を縮小させながらも再興をとげる時期には、有力者の墓域が仙谷地区から松尾頭地区に移っていたことが明らかとなりました。



松尾頭地区で新たに確認された墳丘墓のすがた



鳥取県立むきばんだ史跡公園
 〒 689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木 1115-4
 電話 0859-37-4000 / ファクシミリ 0859-37-4001
 史跡公園ホームページ <https://www.pref.tottori.lg.jp/mukibanda/>
 史跡公園 Facebook <https://www.facebook.com/Mukibanda/>



図1 調査地点位置図 (赤い丸の位置)

【松尾頭地区とは】

松尾頭地区は、「弥生のムラ」が復元されている^{むきやま}妻木山地区の南側に位置します。弥生時代中期後葉（紀元前1世紀～紀元1世紀前半ごろ）に、松尾頭地区に小さな集団が住み始め、妻木晩田遺跡の集落の形成が始まります。集落最盛期である弥生時代後期後葉（2世紀後半ごろ）には、妻木山地区とともに集落の中心地となり、祭殿とみられる大型の建物跡も見つかっています。弥生時代終末期前半（2世紀末～3世紀初めごろ）、一時的に集落規模が縮小しますが、弥生時代終末期後半（3世紀前半ごろ）に再び拡大します。松尾頭地区はその各時期を通じた中心的な居住域でした。

【新発見の墳丘墓について】

図2は発掘調査を行う前の地形図です。この図を見ると、方形の高まりがあり、その周囲が溝状にくぼんでいるのがわかります。平成25年度に実施した第28次内容確認調査でトレンチ調査（図2の灰色の範囲）を行ったところ、外周に溝を伴う、弥生時代終末期の墳丘墓である可能性が高いことがわかりました。

今年度の調査では、全体の面的な調査を行い、さらに南半部の溝の埋土を掘り下げることによって、隅部の溝が途切れることが明らかとなりました。

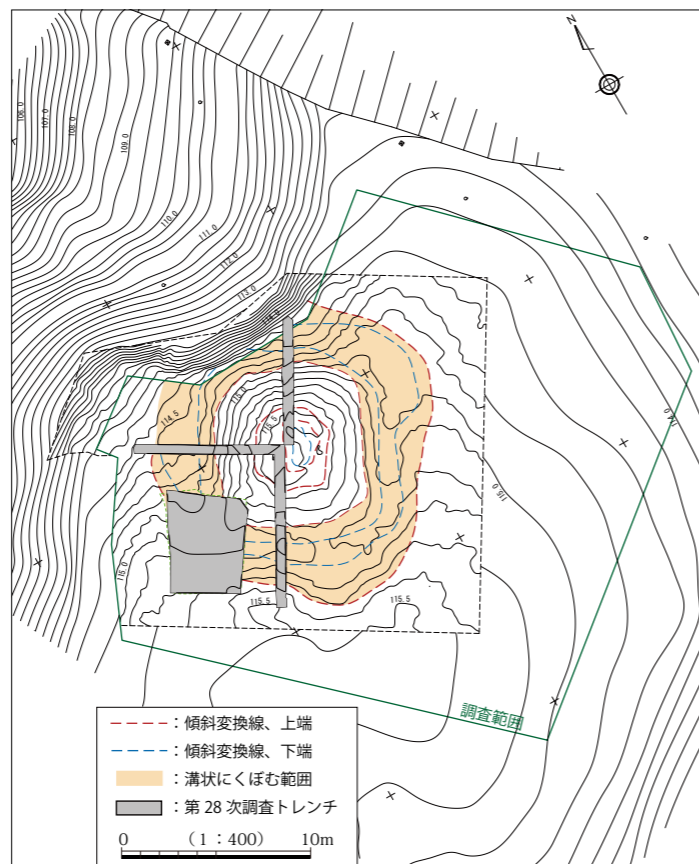


図2 調査前地形図 (1/400)



①西側区画溝から土器（甕）が出土したようす



②北側区画溝から土器（壺）が出土したようす



③東側区画溝から鉄鏝が出土したようす

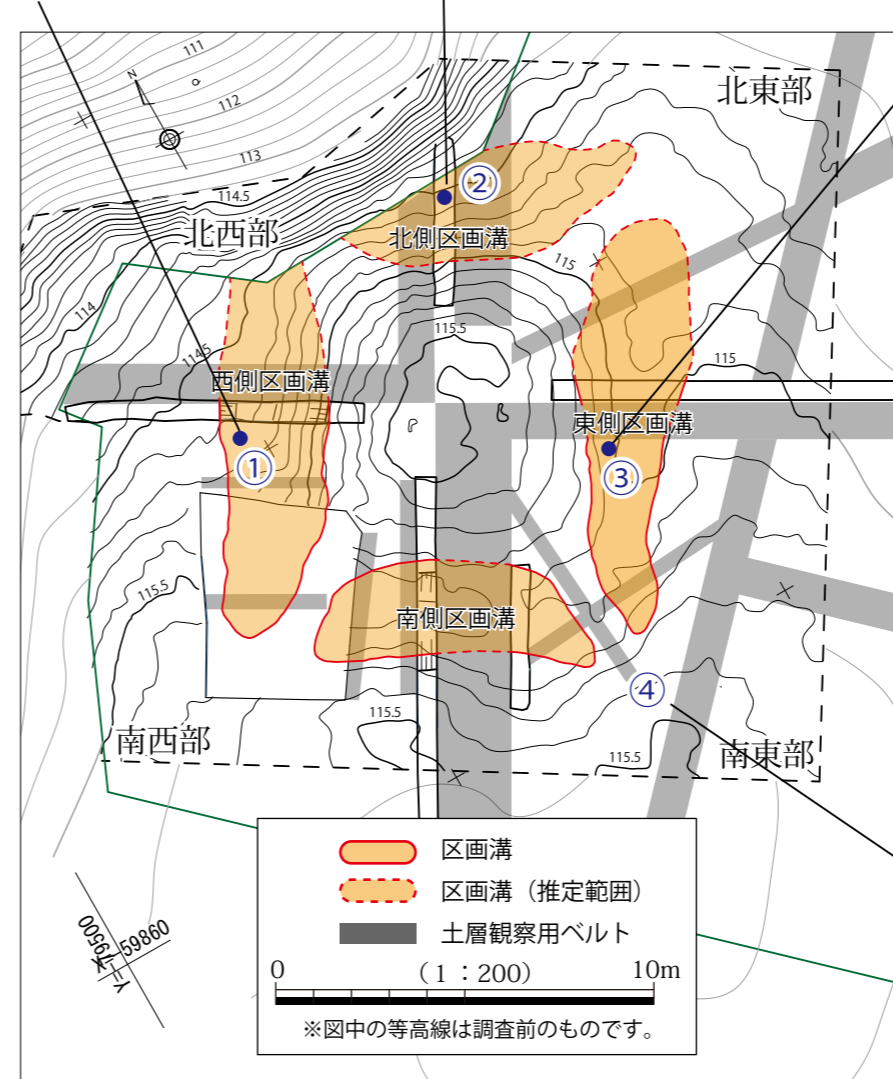


図3 墳丘墓区画溝平面図 (1/200)

- ・墳丘の大きさ 南北 約8m、東西 約7m
- ・墳丘の高さ 約30～50cm (=盛土の厚さ)
- ※西側区画溝の底面から墳頂までの高さは1.25m
- ・区画溝の幅 最大約2m
- ・区画溝の深さ 約20～40cm

【出土遺物】

区画溝の中から土器片が出土しました。特に西側区画溝からの出土量が多く、底面近くからは甕の口縁部が完全な形で出土しました。次いで北側区画溝はトレンチの狭い範囲から、壺の口縁部が破片になって出土しました。東側と南側の区画溝は土器の出土量が少なく、細片が数点出土するにとどまりました。これらの土器は墳丘上で行われた^{さいし}祭祀に使われたものと考えられます。

西側区画溝の底面近くから、鉄鏝（鉄製のやじり）が1点出土しました。長さ9cm、幅2cm、厚さ4mmで、^{やがら}矢柄に差し込むための^{なかご}茎を持ち、細長い葉っぱのような形をした有茎柳葉式と呼ばれるものです。仙谷3号墓では副葬品として鉄鏝が出土した例がありますが、なぜ溝内から出土したのかはまだわかりません。



④南東隅で区画溝が途切れているようす